

2. 文人が愛し魅了され、 今も味わえる金沢の食

文学のまち・金沢。「金沢三文豪」と呼ばれる泉鏡花^{いずみきょうか}・室生犀星^{むろうさいせい}・徳田秋聲^{とくだしゅうせい}を輩出し、ゆかりのある作家も少なくない。そのまちで愛され続ける食の数々は、多くの文人らを虜にしてきた。そんな金沢の食をご紹介します。

金沢三文豪も親しんだ郷里の味の数々

わざわざ“お取り寄せ”をした犀星

金沢の文学を語る上では、三文豪は避けられない。泉鏡花・室生犀星・徳田秋聲、3人とも金沢市内に文学館が設けられ、その作品世界や足跡を知ることができる。

三文豪で、もっとも郷土の食へのこだわりが強かったのは犀星だろう。「ふるさとは遠きにありて思ふもの(中略)帰るところにあるまじや」(『抒情小曲集』より『小景異情』)と詠んだ犀星は、金沢を深く愛していた。その愛は、食も例外ではない。もともと食べるのが好きだったのか、作品での食への言及は非常に多く、詩や短歌、随筆も加えればかなりの数の作品に食が登場しており、なおかつ金沢以外の食はあまり出てこない。

犀星は幼少時、養子として苦労したといわれるが、食の不自由さはあまりなく飢えることはなかったようだ。おそらく幼いころから魚介など金沢の庶民の味に親しみ、作家として大成してからも金沢の食をこよなく愛した。そのエピソードは枚挙にいとまがない。

関東大震災のため帰郷した際、『魚眠洞随筆』という川魚についての随筆を記しており、ごりや鮎、うなぎ、ますなどを紹介、もちろん味についても語っている。ほかにも金沢在住の知人に出した手紙に、かぶら寿しを送ってくれたお礼が書いてあったり、金沢の地酒を取り寄せていたり、軽井沢で開かれた娘(随筆家の室生朝子)の婚礼時には金



室生犀星



(上)ごり
(右)落雁



沢の料亭から料理を運ばせたりした。また甘いものが好きで、毎日決まった時間におやつをいただき、金沢の老舗和菓子店の落雁やようかんは特に大切に食べていたという。

鏡花も食した郷土の味

偏食家として知られた鏡花。極度の潔癖性で、好物の豆腐の「腐」という字を嫌い、「豆府」と記した。その“豆府”も、よく熱してすが入ってしまった“湯豆府”を好んで食べたという。美食よりも衛生面を重視した彼も、随筆では金沢の郷土料理について語っている。そもそも偏食が始まったのは30代、赤痢にかかって以降だといわれ、おそらく幼少時は金沢のさまざまな食を味わっていたのだろう。

金沢の風俗と食文化を紹介した『寸情風土記』には、どじょうの蒲焼き、治部、かぶら寿し、いなだ、くるみの佃煮などが登場する。味についての言及はさほどないが、かぶら寿しは師の尾崎紅葉も絶賛したという。また小説『卵塔場の天女』には近江町市場で売られる香箱がにが登場し、茹でられた真っ赤なかにかが並ぶ美しさを「珊瑚畑に花を培ふ趣がある」と表現している。



泉鏡花



(左) どじょうの蒲焼き
(右) 市場に並んだ香箱がに

秋聲の作中に登場した店が残る

三文豪でもとりわけ玄人好みの作家といわれる、自然主義文学の大家・秋聲。本人が自らを「食通でもなければ、料理通でもない」と評しているが、料理をたしなんでいたこともあり、食にまつわる随筆や小説からはこだわりが少なからず感じられる。



徳田秋聲

金沢に現存する、料理自慢の旅館をモデルにした料理店が登場する短編小説『町の踊り場』。作中で秋聲自身をモデルとする主人公は鮎を所望している。

また現在では狩猟が禁じられたツグミが好物で『鶉の羹』(治部のこと)という短編小説を残している。そのほか随筆『鶉・鰻・鴨など』でかぶら寿し、くるみの佃煮、くちこについて記すなど、決して多くはないが、折にふれ郷里金沢の味を懐かしんでいる。



家庭のかぶら寿し

多くの文人に「書かせる」金沢の食

大衆食に親しむ五木寛之

現代の文壇ではどうだろうか。

ゆかりのある作家としては、五木寛之や三島由紀夫、井上靖、吉田健一、山口瞳など、地元出身の作家としては唯川恵や桐野夏生(幼少時に転居)などが挙げられる。小説・エッセイ、多様な媒体で金沢の食について触れているが、その多くはいわゆる郷土料理だ。

金沢人にとっても親しみがある作家といえば五木寛之だろう。氏が金沢とその近郊を舞台にした作品は枚挙にいとまがない。金沢は夫人の故郷で、作家として大成する前に滞在しており、直木賞受賞の報も行きつけだった金沢の喫茶店で受けた(現在も営業)。作家として押しも押されぬ地位を確立してからも金沢との縁が深く、地元テレビ局の小番組のMCとして、数々の料理店をめぐっている。一度暮らしただけあってうどんやおでん、素朴な和菓子などの大衆グルメについても言及している。

金沢の食に関するエッセイも数多く、特に主計町にある鍋自慢の料亭は幾度となく登場する。氏はその味だけでなく、心遣いや細かなしぐさなどのもてなしも含めて、その店を気に入っているという。その味に加えてもてなしの心も、金沢の食の魅力といえる。



(右)受賞の報を受けた喫茶店(3階)

(左)おでんの一例



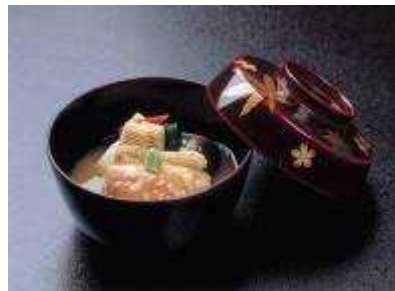
金沢人の心を持ち続ける唯川恵

同じく直木賞作家で、地元出身の唯川恵。大学卒業後、作家としてデビューするまで数年間地元で働いていたため、金沢を舞台にした作品も多数ある。中でも食が重要なファクターとして登場するのが、短編集『病む月』だ。すべて金沢を舞台にした短編で、どじょうの蒲焼き、治部、香箱がに、鯛の唐蒸しなどの郷土料理が登場し、その姿形が印象的に描かれている。

氏は浅野川沿いの常盤橋近辺で生まれ育っており、金沢を「私の作品の原点そのもの」と評している。食も同様にその心身に深く刻み込まれているのだろう。



「おんな川」の異名を持つ浅野川



治部の一例

「金沢愛」が感じられる小説を記した吉田健一

英文学者で、戦後の宰相吉田茂の息子としても知られる吉田健一も、金沢を格別に愛した。東京出身の氏は、雑誌の連載の取材で金沢を訪れた。金沢の地酒蔵で目にした朱壁をいたく気に入り、また美食の数々にも心を奪われたという。それ以来、亡くなる年まで冬になると必ず金沢を訪れた。

それらの経験をもとに、『金沢』というストレートなタイトルの小説を記している。この小説では、自らを投影させたかのような主人公が、金沢に別邸を構え、古美術に親しみながら、ごりやどじょうの蒲焼き、いなだの廉価版といえる棒鰯、五色生菓子などのさまざま



(上) 珍味・ふぐの子糠漬け

(下) 金沢の地酒の一例

まな食に舌鼓を打つさまが、独特の文体で描かれている。作中では金沢はさながら桃源郷のように描かれており、氏にとってこのまちが不思議な魅力を持っていたと推測される。

また、金沢の旅に同行した観世栄夫のエッセイ『金沢でのこと』によると、吉田氏は数日間の道程で治部やふぐの糠漬け、柚餅子^{ゆべし}、地酒などを飲食し、賞賛したという。東京というまちに育ち、おそらく金銭的にも不自由が少なかった作家をここまで魅了した金沢の食の奥深さを感じられる。

食通の文人もうならせた店が残る

今なお高い人気を誇る三島由紀夫も縁の作家。母・平岡^{しずえ}文重が金沢にゆかりがあったため、母を深く愛した氏にとって金沢も興味の対象だったようだ。母が好んだ老舗和菓子店を訪れたり、老舗料亭に泊まったり、片町の裏通り「新天地」のバーに立ち寄ったりしたことが取材ノートに記されている。その後三島は金沢と隣町の内灘などを舞台にした小説『美しい星』を執筆している。

さらに食通として知られた山口瞳も、金沢に魅了されたひとり。食にまつわるエッセイ集『行きつけの店』には、2店登場する。ひとつは現在玉川町に店舗を構える料亭。まだ現在地に移る前、氏はこの店を訪れ、エッセイに記すほど気に入った。また氏の大ファンが営む片町のバーにも足しげく通ったという。金沢の味を美食家も認めたといっちは、言い過ぎだろうか。

また井上靖は、戦前に旧制第四高等学校（現在の金沢大学）に通っていたように金沢に深い縁がある。柔道部に所属しており、そのときの様子は半自伝的小説『北の海』に描かれている。おそらく本人を投影したであろう主人公は育ち盛りの若者らしく、いつも腹をすかせており、食の描写が数多く登場する。いわゆる郷土料理はないが、金沢では牛鍋（すき焼き）を食べており、これは現在も残る老舗精肉店が経営する飲食店のことと推測される。

このほかにも、嵐山光三郎が金沢の地元新聞に連載した食のエッセイをまとめて本にしているなど、金沢とその食は、数々の作品を生む源泉となった。

今も金沢を舞台にした小説作品が多く発表されているように、文人にとって魅力あるまちといえるのではないだろうか。そんな文学をはぐくむまちで、その雰囲気^{きょうき}にひたりながら、文人たちを魅了した食をぜひ味わっていただきたい。